

# 李光洙と「翻訳」

— 『김동익의 설움』 (一九一三) を中心に —<sup>(1)</sup>

波田野 節子

## はじめに

金東仁が初めて朝鮮語で創作しようとしたとき、浮かんでくるのは日本語ばかりなので、それを朝鮮語の口語体に「翻訳」するために苦労したという<sup>(2)</sup>。平壤の大きな屋敷で育ち、朝鮮語経験が十分でないまま一三歳で留学した彼が日本語を朝鮮語に「翻訳」することで創作をはじめたとき、直面したのは朝鮮語表現力の壁であった。帰国後、放蕩生活を送りながら、彼は表現力獲得のために血のにじむような努力することになる。

李光洙は金東仁のような回想を残していないが、金東仁と同じ一三歳で日本に渡った彼が、日本語と朝鮮語のはざままで苦労したことは想像に難くない。中学を卒業するころに書いた日本語の「愛か」が、同時期に朝鮮語で書いた短編「無情」より、はるかに感情表現が豊かであることがそれを推測させる。このころ留学仲間たちと出した秘密雑誌『新韓自由鍾』第三号に、李光洙だけが随筆と紀行文を日本語で書いているのも、情感をこめた文章を書く場合には日本語のほうが楽だったからである

<sup>(3)</sup>。ところで注目されるのは、李光洙が日本語と朝鮮語の二つの言語で創作をはじめた時期に「翻訳」もしていることである。

日本近代小説の嚆矢とされる「浮雲」を書いた二葉亭四迷はロシア語の翻訳家でもあり、「浮雲」を執筆していたころはツルゲーネフの「あひゞき」と「めぐりあひ」を訳していた<sup>(4)</sup>。「浮雲」を執筆して思いうように文章が出てこない<sup>(5)</sup>と、二葉亭はまずロシア語で書いてみてから、それを日本語の口語体に訳して小説を書きつづけたという。日本語の表現力の限界に行きあたったとき、彼はロシア語で考えたり、話し言葉にしてみたりすることで、日本語の表現力の幅を広げようとしたのである。李光洙もまた、「翻訳」によって朝鮮語の表現力を養うことに努めたのではないだろうか。

中学を卒業して五山学校の教員になった李光洙は、一九一三年末から九ヶ月間、大陸を放浪し、一九一五年に『青春』誌に「金鏡」を発表した<sup>(6)</sup>。五年前に書いた短編「無情」とのレベルの差は歴然としており、李光洙がこの間かなりの文章修業をしたことが推測される。時間的に見て、一九一三年二月に新文館から刊行した翻訳『김동익의 설움』(黒ん坊

の悲しみ」がその手がかりになると思われるが、底本が不明であったこともあり、これまであまり研究されてこなかった。<sup>7)</sup>このたび筆者は底本を確定して訳本との対照をおこなったので、<sup>8)</sup>ここでその結果を報告し、あわせて李光洙の初期の文章を「翻訳」という側面から再照明しようと思う。第一章で日韓併合を迎えるまでの李光洙の初期作品を検討し、第二章で『김동의 설움』を分析する。そして第三章では『김동의 설움』刊行から『無情』執筆前までの李光洙のあゆみを、大陸放浪期を中心にたどることにしたい。

## 一．初期創作期

李光洙の中学時代の作品、および卒業後に五山で日韓併合を迎えるまでの著作で現在確認されているものは、表一のとおりである。

小説は朝鮮語の短編「無情」と日本語の短編「愛か」で、そのほかは論説一〇編、詩三編、随筆一編、翻訳二編が朝鮮語、作文・随筆・紀行文の各一編が日本語で書かれている。<sup>9)</sup>朝鮮語の文章はすべて国漢混用文であり、純ハンゲル文はない。

明治学院の留學生が中心となって、一九一〇年春にガリ版刷りで出した雑誌『新韓自由鐘』第三号には、悲憤慷慨の文章がならんでおり、そこに李光洙だけが日本語で随筆と紀行文を寄稿していることが目を引く。随筆「君は伊處に（伊は何の誤記）」は、孤峰という人物が自分の友人李宝鏡の波乱万丈の過去を語りながら、その天才ぶりを称揚したもので、「噫！悲惨とも幸福とも云うべき忘れ能わざる白金のライフはここにて始まりぬ」のような、かなり感激調の文章である。友人が書いた

表一

一九〇八年 五月	『太極学報』第二二号	『國文斗漢文の過渡時代』(論)
〇月	『太極学報』第二五号	『隨病投藥』(論)
一月	『太極学報』第二六号	『血涙』(翻)
一九〇九年 二月	『白金学報』第一九号	『愛か』(小)*
一九一〇年 一月	『大韓興学报』第九号	『獄中豪傑』(詩)
二月	『大韓興学报』第一〇号	『今日我韓青年斗情育』(論)
三月	『少年』第三年第二卷	『無情』(小)「文学の価値」(論)
四月	『富の日本』第一卷第二号	『特別寄贈作文』(作)*
五月	『少年』第三年第三卷	『어린犠牲』(中)「翻」『우리英雄』(詩)
六月	『大韓興学报』第一二号	『無情』(續)「小」
七月	『新韓自由鐘』第三号	『日本에在한我韓留學生을論함』(論)
八月	『少年』第三年第五卷	『旅行の雜感』(紀)*『君は伊處に』(隨)
	『少年』第三年第六卷	『어린犠牲』(下)「翻」
	『皇城新聞』二四、二六、二七日	『今日我韓青年의境遇』(論)「공근」(詩)
	『少年』第三年第八卷	『今日我韓用文에 대하여』(論)
		『余의自覺한人生』(論)「獻身者」(隨)「天才」(論)「朝鮮人사람인 青年들에게」(論)

〈小〉小説「翻」論説「論」詩「隨筆」紀行文  
\*印〓日本語創作 「小説」と「翻訳」をゴシック表示した。

たという形をとっているが、実は李光洙が自分で書いたものである。<sup>10)</sup>一方、李光洙が孤舟の号で書いている紀行文「旅行の雜感」は、故国にもどる旅の情景を綴ったもので、進むにつれて変化していく心持ちが文体にまで反映されていて、中学を卒業するころの李光洙の日本語のレベルがかなりのものであったことを示している。<sup>11)</sup>

日本語で「愛か」、朝鮮語で「無情」を書くと同時に、李光洙は『少年』に「어린犠牲」を発表した。これは、崔南善が翻訳だと思って「孤舟記」としたのを、あとになって李光洙が自分の創作だと主張した作品である。実際、「無情」の硬直した文章にくらべて「어린犠牲」は同じ作者

のものとは思われないほど自由でのびのびとしており、崔南善が翻訳だと思ったのも無理はない。この作品は結局、他の留學生が同じ内容の映画を『大韓興学報』に紹介していたことから、映画の「翻訳」であったことが判明した。<sup>12</sup>ここで「翻訳」という語を用いたのは、もともと「translate」という語が、境界を越えて、あるものを別の場所に運んだり、別の形に置き換えることを意味するところから、映像の内容を言語に置き換える行為を「translation＝翻訳」の一種とみなしてのことであり、「翻案」の意味までも含んでいる。映画の時代背景が一九世紀の普仏戦争期で、舞台もフランスのオルレアンだったのを、李光洙は時代を一八世紀、場所をロシアの圧政を受ける北方のスラブ系小国へと置き換えた。大国に圧迫される小国を舞台にしたことは緊迫感を高める効果をもたらしたが、時代を勝手に変えたために一八世紀に電話電信が存在するなどの矛盾を引き起こしている。

映画の「翻訳」は、李光洙の創作において、どんな役割を果たしたのだろうか。当時の映画はサイレントだから李光洙は字幕あるいは弁士の語る日本語によってストーリーを理解したはずだ。映画を見たあと、彼は記憶をたどりながら朝鮮語で、登場人物たちが話したであろうセリフ、生活や風景の描写、ストーリー展開などを書きうつした。それにはいつも使っている言葉とは違う表現が必要とされる。そうやって朝鮮の事物や思惟から言葉を置き放ちながら、李光洙は朝鮮語で表現できる範囲を広げていったのだろう。「어린犠牲」の特徴の一つは、室内の描写や人間の動きの説明が具体的に視覚的なことだが、これはのちに李光洙の文章の特徴になる。

李光洙にとってこの作業はまた、日本語から解き放たれることでもあったと思われる。一日中、日本語に囲まれて生活していた彼は、日本語で話し、考え、ついには創作もするようになっていた。その彼が朝鮮語で創作するときに困難を覚えたであろうことは想像にかたくない。金東仁と同じ苦しみを彼も味わったはずである。

ところで、ここにもう一つ想像をつけ加えるならば、李光洙は見た映画を朝鮮語に書きうつす前に、友人たちに話して聞かせる、つまり口語化というステップを踏んでいたのではないだろうか。李光洙は一週間に一度、明治学院の仲間たちを集めて、自分が読んだ本の話を目白おかしく聞かせたことを回想している。<sup>13</sup>それならば、見た映画の話も聞かせたに違いない。いったん話したものを文章に書きうつす、すなわち文章化の前に口語化のステップを経ることによって、「어린犠牲」は「信じがたいほど傑出した作品」<sup>14</sup>になったと思われるのである。

「어린犠牲」の一年前に李光洙が『太極学報』に発表した「血涙—ギリシヤ人スパルタクスの演説—」も、映画の「翻訳」だったと考えられる。反乱を決意するスパルタクスを描いたこの作品は、ストーリーが壮大で描写に圧倒的な力強さがある。後記に「訳者曰」とあるので翻訳のようだが、それにしても内容に錯誤が多くてちぐはぐな印象を与えている。<sup>15</sup>トラキア出身のスパルタクスをギリシヤ人としている副題から始まって、反乱を起こした紀元前一世紀を紀元二、三世紀とするなどの誤りは、「어린犠牲」と同様、正確な情報をもたずに映画のシーンとストーリーを記憶によって書きうつしたために起きたものである。底本がある翻訳ならば、こうした間違いは起こらなかったはずである。論説をの

ぞけば最初に活字化された李光洙の文学的文章である「血涙」が「翻訳」であったことは、特筆すべきである。

李光洙にとって「翻訳」は、日本にいなから朝鮮語の表現力を養うために必要な修行だった。「愛か」と「어린犠牲」に比べてつたない印象を与える「無情」の文体は、彼がいざ朝鮮を舞台に、朝鮮語で、朝鮮人の心情を描こうとすると必ずしもうまく行かなかつたことを示している。中学を卒業するころ、李光洙は日本語創作にかなりの自信をもって日本文壇への雄飛さえ夢見たほどだった<sup>(16)</sup>。だが朝鮮にもどり、朝鮮語で小説を書いていくことになったとき、彼は朝鮮語の表現力の必要を痛感したはずである。帰国後の彼はしばらく小説創作から遠ざかっている。

一九一〇年八月二五日発行の『少年』は、翌日、新聞紙法によって押取られ、その四日後に「日韓併合」が公布された。それ以降、李光洙の著作活動はとだえる。だが、五山学校で過重なまでの授業を担当し、収監された校主李昇薫の村である龍洞の生活改良指導をするなど、「民族主義の実践」に邁進しながらも、李光洙は「翻訳」によって朝鮮語の表現力を高める努力をつづけていた。一九一三年二月、新文館の翻訳単行本シリーズ「新文館発刊新小説」の一冊として刊行されたストウ夫人著『Uncle Tom's Cabin』(一八五二)の抄訳『검둥의 설움』がそれを物語っている。『검둥의 설움』はこれまで国漢文しか書いてこなかつた李光洙にとって初めての純ハングル文だった。しかし、これは崔南善の方針にしたがつた結果にすぎず、李光洙の自覚的な選択ではなかつた。李光洙はその後もなかなか純ハングル文を書こうとしない。

## 11. 『검둥이 설움』

### (1) 二つの底本

『검둥의 설움』の底本が何であるかは長いあいだ不明だった。それにはいくつかの理由がある。まず『검둥의 설움』に銅版画の挿画がついていたために、英語からの翻訳だという誤解が生じていたことが挙げられる<sup>(18)</sup>。筆者自身、この挿絵を見て『검둥의 설움』の底本はアメリカで刊行されたダイジェスト版だろうと思ひ、底本を探す努力を怠っていた。中学を出たばかりの李光洙の英語の実力では膨大な原典からの抄訳は無理だから、底本となつた英語ダイジェスト版が存在するのだろうと考えたのである<sup>(19)</sup>。ところが、実際には李光洙が底本にしたのは日本で出版されていた抄訳だった。内外出版協会から明治三六(一九〇三)年に刊行された堺枯川編輯『家庭夜話第三冊 仁慈博愛の話』と、同じく内外出版協会から明治四〇(一九〇七)年に刊行された百島冷泉抄訳『通俗文庫第二編 奴隷トム』の二冊がそれである。見てのとおり、前者のタイトルには「トム」の名がついておらず、図書検索に引つかからなかつたことも発見を遅らせる原因になつた。しかし何といても底本の確定を難しくしていた最大の理由は、底本が二冊であることと、その組み合わせ方が複雑だつたことにある。李光洙は二冊のテキストをあるいは組み合わせ、あるいは融合させたいえに、自分の文章をあちこちに挿入しているために、単純なテキスト対照ではわからなかつたのである<sup>(20)</sup>。

明治三六(一九〇三)年に刊行された堺枯川編輯『仁慈博愛の話』は、三二章で構成された約二〇〇頁の抄訳本である。原典の四五章に比べて

章の数が三分の二で、一章ずつの分量もはるかに少ない。枯川は堺利彦の号で、この本は彼の社会主義者としての信念に基づいて訳されたものである。第一章で堺は米国の奴隷制度と奴隷解放について説明したあと、日本には奴隷制度がないというが「貧乏人は矢張りある点において奴隷であり、だからこそ「是等の哀れる人々に対し、及び我々と異なる人種」に対して「仁慈博愛の心」を抱かせるためにこの本を訳したと書いている。たとえば、奴隷の哀れな境遇に対してまったく思いやりがない冷酷なマリ夫人の言動を述べたあと、「日本にも斯う云ふ奥様嬢様が随分少くは無い様だ」と原文にはない皮肉を挿入するなど、堺の意図はあちこちに現れてくる。『Uncle Tom's Cabin』のもう一人の主人公である逃亡奴隷ジョージとその妻エリザについての章が全体の三分の一を占めて、ストーリーの大きな柱となっていることもその例である。<sup>23</sup>自由になったあとフランス留学したジョージが、卒業後はアフリカの人民を文明に導くために一家を引き連れてリベリア共和国に向かうところまで書きこまれて、逃亡しない奴隷であるトムの悲劇との対照をきわだたせている。

一方、明治四〇（一九〇七）年に刊行された百島冷泉の『奴隷トム』は一五章構成で、頁数も『仁慈博愛の話』の半分以下の短い抄訳である。長さの関係もあったのだろうが、ジョージ夫婦の話を完全に省略して、トムの悲惨な運命と、それに打ち勝つ信仰心、そしてトムとエバとの美しい心の交流を描くことに焦点をあてている。神を信じて国の法律を守るトムの姿によって読者に「教訓」を与えることを主眼にした本といえる。<sup>24</sup>

それでは、なぜ底本は二冊になったのだろうか。崔南善が書いている『김동의 설움』の序文によれば、李光洙に翻訳を依頼したのは崔南善だった。崔南善は、「この本」を読んでから六、七年たった今も『アンクルトム』と聞けば作中の文句が浮かんで胸が迫ると書いて、その文句をいくつか挙げている。<sup>25</sup>末尾に「ストウ夫人生誕百年目の十月月日、長いあいだ翻訳を計画してきて、ついに외배の手を借りて一部とはいえ我々の言葉への翻訳を終えた日に」とあり、翻訳が一九一二年一〇月に終わったことがわかる。一九一二年の六、七年前といえば旧計算法で一九〇六年か〇七年である。崔南善は一九〇七年に早稲田大学高等師範部歴史地理科に入り、翌年三月に模擬国会事件に抗議して退学帰国している。そして、その翌年に『少年』を創刊したのである。堺の『仁慈博愛の話』は一九〇三年三月、百島の『奴隷トム』は一九〇七年一二月の刊行だが、崔南善の挙げた文句がどれも『仁慈博愛の話』の中にしかないことから、崔南善が翻訳を決意するきっかけになったのが堺の書であったことは明らかである。崔南善が挙げているのは、たとえば次のような文句である。

ジョージ曰く

「御覧なさい、私を。チャンと人間のする通りに腰掛けて居るではありませんか。御覧なさい、私の顔を、手を、身体を。これでも私は「人」でありませぬか」<sup>26</sup>

日本のアジア人蔑視の風潮に憤激して早稲田大学をやめた崔南善の心

は、奴隷ジョージのこの言葉に鋭く反応したのである。先に挙げた堺の文章には「是等の哀れなる人々」すなわち貧しさのために奴隷になっている人々と並んで、「我々と異なる人種」があることも崔南善の心をとらえたはずである。

一方、『奴隷トム』を底本にすることについては、翻訳者である李光洙の意向が反映したのではないかと、筆者は推測している。一九〇七年秋に明治学院に編入した李光洙はまもなくキリスト教を知って木下尚江とトルストイの作品を耽読し、夜は林をさまよって神に祈りをささげるとような清教徒的な少年になった。このころ刊行された『奴隷トム』はそんな李光洙の心をとらえたに違いない。あどけないエバが庭で笑いながらトムを花輪で飾る場面、夕焼けに赤く染まった湖のほとりでトムと黙示録を読みながら自分の死を予言する場面、エバの死後、綿花農場に売られたトムの夢先にエバがあらわれる話など『仁慈博愛の話』では省略されている感動的なエピソードを、李光洙はぜひ入れたいと考えたのではないだろうか。

こうして『김동의 설움』は二つの底本を持つことになった。『仁慈博愛の話』を基本的な底本としながら、場面によっては『奴隷トム』を底本とし、また一方を底本にしている場合もつねにもう一方を念頭において、李光洙は二つの底本をまさに自家葉籠のものとして活用し、最後には二つの底本を融合して自分の文章に作り直した。その様相を次に考察する。

## (2) テキスト対照

『김동의 설움』のテキストにおいて『仁慈博愛の話』と『奴隷トム』がどのように底本として使われているかを示すために、表二を作成した。上段に『김동의 설움』の各章のストーリー、下段にその章の底本に関する情報を入れて、書名をゴシック表記した。『仁慈博愛の話』は『仁慈』、『奴隷トム』は『奴隷』と略記した。

表二

ストウ夫人の事績	
<p>【1】セルビーが奴隷商人ハレーにトムとハリを売る話をエリザが立ち聞きする。エミリー夫人に訴えるが夫人は本気にしない。</p> <p>【2】エリザの夫ジョージ・ハリスも奴隷だった。エミリー夫人が外出したあと、エリザを訪れた彼は妻に逃亡の決意を告げ、そのわけを話す。</p> <p>【3】その夜、セルビー夫妻の会話を聞いたエリザは息子を連れて逃亡する。まずトムの小屋に行つて一緒に逃げようとするが、トムは断る。</p>	<p>出だしは李光洙の文章。そのあとは「奴隷」の「付録ストウ夫人」を底本にしている。</p> <p>出だしは李光洙による概略。そのあとは「仁慈」(一)「借金ほどツライものは無い」を底本にしている。</p> <p>前半は「仁慈」(三)「物」であつて人ではない、後半は「仁慈」(四)「モウどうしても我慢が出来ぬ」を底本にしている。</p> <p>出だしの部分は「奴隷」(一)、夫婦の会話の途中から「仁慈」(六)「ハリや、お前は買られたのだよ、エリザがトムの小屋に着くときの描写は「奴隷」(五)「トム爺クロー婆、そしてエリザがトムに話し始めるところから、ふたたび「仁慈」(六)を底本にしている。李光洙は二つの底本を必要に応じて組み合わせている。</p> <p>前半は「仁慈」(七)「してやったりという顔つきで、後半は「仁慈」(八)「惜るやら、飛ぶやら、踏みはづすやら、躓くやら」の中間部分を底本にしている。</p> <p>「仁慈」(八)を底本にしているが、初頭部分の故郷を離れる悲しさの描写には李光洙の創作が混じっている。なお(八)の一部は【4】でも底本にされている。</p> <p>「仁慈」(九)「唇が動くばかりで聲は少しも出ぬ」を底本にしている。最終二段落を省略。</p>
<p>【4】ハレーは逃亡したエリザを追跡しようとするが、セルビー家の人々は示し合せて出発を遅らせる。追跡者一行は夕方ようやくエリザに追いつく。</p> <p>【5】川辺にたどり着いて宿に入ったエリザは、ハレーに見つかり、川の氷に飛び乗って川を渡りきる。そこで偶然、顔見知り助けられ、彼から助けてくれそうな人の家を教えられる。</p> <p>【6】オハイオ州の元老院議員のバードは逃亡奴隷の保護を禁止する法律に賛成したことで妻のメリと言い争うが、エリザが助けを求めてくると黙って助けてやる。</p>	<p>前半は「仁慈」(七)「してやったりという顔つきで、後半は「仁慈」(八)「惜るやら、飛ぶやら、踏みはづすやら、躓くやら」の中間部分を底本にしている。</p> <p>「仁慈」(八)を底本にしているが、初頭部分の故郷を離れる悲しさの描写には李光洙の創作が混じっている。なお(八)の一部は【4】でも底本にされている。</p> <p>「仁慈」(九)「唇が動くばかりで聲は少しも出ぬ」を底本にしている。最終二段落を省略。</p>

<p>【7】 トムを連れにきたハレーは、トムに足枷をする。セルビーの息子ジョージはちよど留守だったが、鍛冶屋でトムに追いつき、足枷を見てハレーの仕打ちをなじる。</p>	<p>「仁慈」(十七)「己お前さまの志しだけで澤山だ」が底本だが、「横にエミリー夫人がいるのを見て」など「仁慈」にはない部分もあって、「奴隷」も参考にしてはいることがわかる。ジョージとハレーの会話からあとは「奴隷」を底本にしており、二つの底本を組み合わせている。</p>
<p>【8】 逃亡したジョージ・ハリスは変装してケントッキーにもどり、偶然、雇主だったウィルソンと再会する。ウィルソンは彼に法律を破ってはいけないと諭すが、自由を求めるジョージの話に感動して金を与える。</p>	<p>「仁慈」(二十一)「私の母は七人の子供と一緒に公堂に附きました」を底本にしている。ジョージの母が胸を蹴られた話を、蹴られて死んでしまったことを知っているが、これは誤訳ではなく、悲劇性を高めるためだと思われる。 ・ジョージの演説はかなり過激である。</p>
<p>【9】 ミシシッピ川を下る船の中でトムはエバと知り合う。川に落ちたエバを助けたトムを、父親のクレルがハレーから買い取る。</p>	<p>「仁慈」(二十三)「千三百圓ではお安いものです」をほぼそのまま底本にしている。</p>
<p>【10】 トムは豪壮なクレルの家に着いて、使用人やエバの母マリ夫人に会う。クレルが姉のオベリアを連れてきたのは病気がちな妻にかわって家を取り仕切るためだった。</p>	<p>帰宅の場面は「仁慈」(二十四)「旅は長くして手紙は短く」の後半部分を底本にしているが、そのあとクレルの夫婦関係とクレル家の事情を説明するところは、同じ(十四)の前半部分を李光洙が要約して使っている。</p>
<p>【11】 帰宅の三日後にクレル家の朝飯の席でかわされた、奴隷に関する会話。マリ夫人の自分勝手な論理にはオベリアも驚く。</p>	<p>「仁慈」(二十五)「思ひやりと云ふ事は微塵も無い」を底本にしている。「奴隷を嫌いなことでは人に負けないオベリアもマリ夫人の意地悪な言葉にむしる反抗心がわいた」の一文は剣光洙の創作。最後の「日本にも斯う云ふ奥様嬢が随分少なくは無い様だ」 「아, 이런 정다운 사람은 단단히 메리키예만 있지 것인가!」という一文は堺の創作を李光洙がそのまま取り入れたもの。 ・次章(十六)「自由の為に飽くまでも戦ひます」を省略したのは内容の過激さのためか?</p>
<p>【12】 トムはクレルから信頼され、エバに愛される。主人に信仰がないことを心配するトムはある日、主人の品行を泣いていさめ、主人も反省する。</p>	<p>トムがクレルに信頼され、またエバに愛される部分は「奴隷」(五)を底本にしている。エバが、トムを花輪で飾る話は「仁慈」にはない。だが、トムが主人をいさめる部分は「仁慈」(十七)「私いつそ地獄へ行きたいだアよ」の前半を底本にしている。李光洙は必要に応じて底本を選んでいることがわかる。</p>
<p>【13】 バンを売りに来る女奴隷ベルの不幸な生涯の話。トムがエバに彼女の話をすると、エバは青ざめる。</p>	<p>「仁慈」(十七)の後半部分を底本にしている。最後の一文「トム、私、モウ遊びに行くの止すわ」を「예, 어떻게 하면 이런 일이 다 없어지고 착한 세상이 되겠나?」と意識している。</p>

<p>【14】 クレルはトプシーという黒人の女の子を買ってきて、オベリアに教育をまかせる。ようやくしつめたと思つて油断した日、トプシーはまた騒ぎを起し、ぶたれてもまったく反省しない。</p>	<p>基本的に「奴隷」(六)(七)を底本にしており、「フリーのリボン」の誤訳まで踏襲している(「フリーはオフェリアのことだが人名のよに誤訳。しかしオフェリアがトプシーを引き受けざるを得ない事情の説明部分は李光洙がまとめたものだし、帽子を切り裂くエピソード(これは「奴隷」にない)は「仁慈」(十九)「私こんな碌でなしだからウンと打つが好えだ」から取るなど、二つの底本を組み合わせている。</p>
<p>【15】 トムはクレル家にきて二年後に家族に手紙を書き、金を貯めて迎えにいくという返事を受けとる。その二年後、避暑にいった湖畔の屋敷でエバの健康が悪化する。エバは母に奴隷たちに字を教えたいと話す。ある日トムに黙示録の話をしたあと病状が悪化する。</p>	<p>前半は「仁慈」(廿)「読み書きができれば前の位つらがつて居るか知れませぬわ」が底本。ただし「二年」という数字は「奴隷」(八)を誤読して前後二年ずつにしている。(本当はクレル家に来てすぐに書いた。「仁慈」では間接話法で書かれているジョージの手紙を李光洙は書簡体の直接話法に直している。後半の黙示録のエピソードは「仁慈」にはなく「奴隷」(八)から取ったもの。ここでも李光洙は二つの底本を組み合わせている。</p>
<p>【16】 ある日エバは父に奴隷を自由にしてほしいと訴え、父はトムを解放することを約束する。</p>	<p>「仁慈」(廿一)「トムだつて大変子供を恋しがつて居ますわ」を底本としつつも、最後の、クレルの死を予告するようなエバの言葉だけを「奴隷」から取ってきて使用。</p>
<p>【17】 数日後、トプシーがオベリアの帽子を切つて人形の服にする事件が起きる。反省しなかつたトプシーだが、エバのやさしい言葉に涙を流す。</p>	<p>「仁慈」(廿二)「罪ある者を救ふ為に天降つた天の使」を底本にしている。</p>
<p>【18】 花を摘んでマリ夫人に怒られたトプシーをエバがかばう。そのあとエバは髪を切つて皆に分ける。</p>	<p>「仁慈」(廿三)「お前にも天國で逢えるわねえ」を底本としているが、細部が少し違っている。 *天國다, 섰다, 고요해진다, なんだ, ということ表記が見える。</p>
<p>【19】 とうとうエバが亡くなる。トプシーが心から悲しむのを見たオベリアは彼女を愛するようになる。クレルはトムに解放することを告げるが、喧嘩に巻き込まれて刺殺されてしまう。</p>	<p>前半は「仁慈」(廿四)「其打震ふ聲の響に其言葉よりも人に感じさせる力があつた」後半は「廿五」人は何時死めものでも無い」を底本にしている。</p>

【20】マリ夫人は家産を整理して実家に戻ることにする。オペリアはトムを解放しよう忠告するが拒絶され、セルビー夫人に手紙を書く。トムは競売に付される。トムを買ったレグリーはトムの荷物に聖書があるのを見て信仰を禁ずるが、トムは心なで拒否する。レグリーは若い混血奴隷のエメリーに手を出そうとする。汚い小屋に到着したトムはさそく仕事に出る。

【21】その夜、疲れ果てたトムはエバの夢を見る。ある日トムは畑で女奴隷に綿花をわけてやってぶたれる。夜、その女を打てと命じられたトムは拒否してぶたれ、霊魂は買えないと答えてさらにおたれる。

【22】トムはひどく傷つくがすぐ畑に出される。体が弱って死を予感したトムはそれでも周囲の人々を助け、人々に信仰を手やる。トムに勇気を与えられた女奴隷カシーは、エメリーと一緒に逃亡に見せかけて幽霊部屋に隠れる。レグリーの怒りはトムに向かい、トムを死ぬまでと命じる。

【23】その二日後、父セルビーの死の後始末で時間を取られたジョージ・セルビーがようやくトムの居場所をつきとめる。意識を取り戻したトムはレグリーを恨むなと言って死ぬ。ジョージは彼を埋葬して家に向かう。

クレルの死に対するトムの心情を述べた初段落のみ「奴隷」(十)から取り、第二段落からあと、すなわちクレル亡き後の奴隷たちの悲惨な状況や、トムの解放についてのオペリアとマリ夫人のやりとりは「仁慈」(廿六)人間の顔を被った鬼」を底本にしている。トムが売られる部分には李光洙がまとめた文章、レグリーがトムの荷物を取らなげで信仰を禁じ、トムが心の中でそれだけできないと考える場面と、レグリーとエメリーのやり取りは「奴隷」(十一)を底本とし、レグリーの家への到着からトムが仕事に出るまでも「奴隷」(十二)を底本としている。「仁慈」にこの部分はない。

クレルの死後の話、トムがレグリーに売られ、彼の家に着くまでの複雑なストーリーを二つの底本から李光洙が要約説明している。

エバの夢の話は「仁慈」にはなく、「奴隷」(十二)を底本にしている。女奴隷に綿花をわけてぶたれる話は「仁慈」(廿七)「私の魂ばかりはお前様買ふこと出来ねえだ」と「奴隷」(十三)の二つから交互に取り入れている。「仁慈」では老女一人だけが登場するが、李光洙はこの二人を融合させて一人にしている。この章では李光洙は訳すだけでなく、登場人物の改(削)作までしている。

最初は「仁慈」(廿九)「散りぎは近き焼稼」を底本にし、ただし、ぶたれたトムが動きや喉の渴きに苦しむ場面は「奴隷」(十四)から取っている。カシーの経歴を省略すると述べる部分、彼女がエメリーのために逃亡の決心をするまでの経緯は李光洙の文章。二人の逃亡からレグリーがトムを死ぬまでぶたせるところは、「仁慈」(三十)「私を殺されてお前様を怨みはしませんぞえ」および「奴隷」(十四)の二つをともに底本にしている。

基本的には「仁慈」(三十二)「私神様に買はれて行く身だよ」を底本にしているが、トムの死の場面は「奴隷」(十五)もあまり変わらないので、二つを同時に底本にしている。「仁慈」の最後の言葉「사랑속에 있는 우리는 뉘 곁에 있나」は「奴隷」にある「基督の愛から誰だって俺共を離すことは出来ない」から取っている。

【24】逃亡したカシーは旅館でジョージ・セルビーと出会い、協力を求める。同宿のドドウというフランスの夫人がその話を聞いて、奴隷ジョージのことを尋ねる。ドドウは彼の姉、カシーはエリザの母親だったことが判明する。一同はジョージ夫妻の逃亡先のカナダで再会し、夫妻はフランスに留学する。大学を卒業後、ジョージは母の国を助けようとしてオペリアに向かう。トプシーもちにアメリカに伝道に行く。家にもどったジョージは奴隷たちを解放する。

「仁慈」(三十二)「トムの恩」を底本にしているが、翻訳ではなくて、内容全体をまとめてある。最後にジョージが家の奴隷を解放する場面は底本では間接話法のところを直接話法に直してある。

ゴシック表記された書名を見ればわかるように、『仁慈博愛の話』の使用頻度が圧倒的に多く、『奴隷トム』だけを底本にしている章は見あたらぬ。したがって『仁慈博愛の話』が主底本といえる。全二四章のうち、『仁慈博愛の話』だけを底本にしているものは以下の一四章である(一・二・四・五・六・八・九・一〇・一一・一三・一六・一七・一八・一九)。このなかには、故郷を離れるエリザの心情を李光洙が介入して描写したり(五)、クレル夫婦の関係やクレル家の事情を李光洙が要約するなど(一〇)など、一部に李光洙の手が加えられている章もある。

二つの底本が組み合わされているものは以下の一〇章である(三・七・一二・一四・一五・二〇・二二・二三・二四)。とくに最後の五つの章は底本の融合度が高く、李光洙による加筆も多い。第二〇章ではクレルの死後にトムが売られて綿花農場に到着するまでの複雑な経過を李光洙がまとめているし、第二章の、綿畑でトムが助ける女奴隷は、二つの底本の違った人物を李光洙が融合させて創り出した人物である。最終章である第二四章は『仁慈博愛の話』を底本にしながらも、翻

二つの底本が組み合わされているものは以下の一〇章である(三・七・一二・一四・一五・二〇・二二・二三・二四)。とくに最後の五つの章は底本の融合度が高く、李光洙による加筆も多い。第二〇章ではクレルの死後にトムが売られて綿花農場に到着するまでの複雑な経過を李光洙がまとめているし、第二章の、綿畑でトムが助ける女奴隷は、二つの底本の違った人物を李光洙が融合させて創り出した人物である。最終章である第二四章は『仁慈博愛の話』を底本にしながらも、翻



訳というより、むしろ李光洙が全体を要約したものと見える。

先述したように、自由を求めて逃亡するジョージ夫妻の話は『奴隷トム』にはないから、ジョージたちの話を扱っている章（一―六・八・二四）はすべて『仁慈博愛の話』が底本である。しかし、たとえば第三章でエリザがトムの小屋を訪れるときの描写だけは『奴隷トム』から取るなど、必要に応じて李光洙はもう一つの底本を利用している。逆に、トムの信仰やエバとの心の交流に関する、宗教臭が強くて情緒的な部分は『仁慈博愛の話』では省略されているので、そこは『奴隷トム』を底本にしている。先述した花輪のエピソード（一一二）や黙示録のエピソード（一一五）、エバが父の死を予言するような謎めいた言葉を口にする場面（一一六）などがその代表的な例である。

全体的に見て、先に進むにつれて訳者の介入が増えていく。とくに二〇章から先は、李光洙が底本を下敷きにしながらストーリー展開を考え、文章も自分で作っているとみなされる部分が多い。はじめは底本にたよっていたのが、次第に自分で内容を組立て、それに従って文章も自分で作るようになっていったのだろう。終わりの部分だけでなく途中の章でもその要素は見いだされるが、単行本であるから、連載と違っていつでも手を入れることができたはずである。このほかに李光洙が映画を見た可能性も考慮すべきであろう。ストウ夫人の『Uncle Tom's Cabin』は一九〇三年から一四年までに四回に映画化されているから、李光洙がこれを見て取り入れた可能性は十分にある。<sup>28</sup> また李光洙が東京にいた一九〇七年には東京で中国留学生たちが結成した演劇団体春柳社が「アンクルトムの小屋」を上演している。<sup>29</sup>

以上、『김동의 설화』とその底本二冊『仁慈博愛の話』『奴隷トム』とのテキスト対照をおこなない、李光洙が二つの底本を組み合わせて自分なりの新たなテキストを作りあげていく過程を見た。日本語を朝鮮語に訳すことで表現力をやしなひながら、李光洙は映画のときと同じように底本の内容を頭の中で自分なりに組み立て、同時に底本の日本語からも離れて自分の言葉で書くようになっていったのである。

### 三. 大陸放浪と翻訳「許生員」

一九一三年二月に『김동의 설화』を刊行した李光洙は、その年一月に大陸放浪の旅に出た。まず上海に行き、そこからウラジオストクに渡って穆稜の李甲のもとでひと月過ごしたあと、二月末にチタに着いたが、旅費の問題でそこに滞在を余儀なくされ、結局、八月の第一次大戦勃発を迎えて帰国した。<sup>30</sup> 約九ヶ月の旅だった。帰国の翌年、李光洙は日本に再留学し、翌一九一六年の秋に『毎日申報』に論説を発表して脚光を浴び、年末に『無情』を書き始めるのである。『김동의 설화』以降、『毎日申報』に執筆する以前の著作で現在確認されているものは、表三の通りである。

李光洙は大陸を放浪しながらも書くのをやめていないことがわかる。ウラジオストクの在露朝鮮人組織勸業会の機関紙『勸業新聞』に「우립준비회시오(獨立を準備せよ)」全四回を寄稿したのは、この地を訪れた一月に依頼を受けてのことであろう。三月一日から掲載が始まっているので、穆稜の李甲のもとにいたころに執筆したと推定される。<sup>31</sup> この論文で李光洙は実力養成、とくに商業の振興による経済力の養成を主張

しているが、これについてはこのあと触れる。チタでは大韓人国民会シベリア総会の機関紙『大韓人正教報』の編集を手伝い、六月からは主筆をつとめた。そのころ書いた「재외동포의 현상을 논하야 동포교육의 긴급함을 (在外同胞の現状を論じて同胞教育の緊急たるを)」は大陸に在る朝鮮人同胞の現状を嘆いて改革のための教育方策を述べたもの。「지사의 감회 (志士の感懷)」は李甲がベルリンで病んでいたときに壁に掛けられたドイツ皇帝の肖像画と会話した話。そして「나라를 떠나느 설음 (国を出る悲しみ)」は海外に行つた愛国志士の夫を恋う妻の心情をうたつたものである。<sup>(32)</sup>

表三

一九一四年 三月 六月	『勸業新聞』一〇〇—一〇三号 『大韓人正教報』一一号	「독립준비하시오」(論) △ 「재외동포의 현상을 논하야 동포교육의 긴급함을」(論) △ 「지사의 감회」(隨) △ 「나라를 떠나느 설음」(詩) △ 「면적골 가난방이로 한 세상을 들며머뭇한 허성진」(翻) △ 「上海서 (第一信) (紀) (제아이) (詩) (同情) (論) [中學校訪問記] (論) [문나라의 배판] (童) [上海서 (第二信) (紀) [남나신날] (詩) [讀書를 勸함] (論) [許生傳] (七) 산문시 (詩) [내 소와 개] (隨) △ 「金鏡」(小) [海峽威로치] (紀) [沈黙의 美] (詩) [한그믐] (詩) [내 소원] (詩) △ [生活難] (詩) △ 「공화국의 理想」(論) △ 「크리스마스밤」(小) [龍洞] (論) 「어린 벗에게」(詩) [살아라] (論)
一九一五年 一月	『재별』 一五号 『青春』 四号	
三月	『재별』 一六号 『青春』 六号	
五月	『學之光』 五号	
一九一六年 三月	『學之光』 八号	

△は純ハングル文。〈童〉は童話、ゴシック表記は小説、翻訳およびそれに関連した詩

注目されるのは、李光洙がこの旅のあいだに漢文の「翻訳」をしていることだ。六月に児童雑誌『아이들 보이』一〇号に掲載された「면적골 가난방이로 한 세상을 들며머뭇한 허성진 (墨積洞の貧乏両班として世間を驚かした許生員。以下「許生員」と略す)」は、朴趾源(一七三七—一八〇五)の『熱河日記』「玉匣夜話」にある許生員についての話を子供向けの丁寧な口語体で訳したものである。<sup>(33)</sup> 李光洙は、日本語からの「翻訳」につづいて漢文からの「翻訳」をしたわけである。冒頭部分の原文と訳文を引用する。

許生居墨積洞 直抵南山下 井上有古杏樹 柴扉向樹而開 草屋數間 不蔽風雨<sup>(34)</sup>

남산 밑 먹적골에 허성원이란 이가 살았습니다. 구차하기 짝이 없어 오막살이 초가 몇간이 비바람을 가리지 못하고 먹는 것은 끼니를 찾지 못하나 생원은 들어앉아 글만 읽고 달리발을 아니하였습니다.<sup>(35)</sup>

(南山の下の墨積洞に許生員という人が住んでいました。この上なく貧しく、小さなボロ家は雨風をしのげず、食事にも事欠きましたが、生員は座つて書ばかり読み、お金を稼ごうとはしませんでした。)<sup>(36)</sup>

崔南善の光文会は一九一一年一月二月に『熱河日記』を刊行しているの  
で、李光洙はこれを底本にしたと思われる。李光洙が旅に出る二カ月前、  
崔南善は児童雑誌『봄은 저고리』の後続雑誌として『아이들 보이』を

創刊している<sup>37</sup>。そこに載せるために、彼は古典の翻訳を李光洙に依頼したのだろう。李光洙が旅に出る前に翻訳した原稿を崔南善に託したなら、半年以上も掲載されないはずはない。また、このあと見るように、内容から見ても「許生員」はチタで翻訳された可能性が高い<sup>38</sup>。

「許生員」の訳文は原典にかなり忠実だが、それでも改変は加えられている。まず構成の面では、全体を七つにわけて各節にわかりやすい見出しをつけ、子供には難しい政丞李浣との対話を完全に省略してある。内容面でもいくつか改変がある。原典では妻に小言を言われた許生員が一〇年の修行予定を七年で打ち切って家を出ていくが、「許生員」では「男子が一度決めたこと」だと言って一〇年の修行を終えてから家を出る。また盗賊たちを残して島から去るときに許生員が「有知書者」だけを連れていく原典とは違って、李光洙の許生員は「엇메 걱정거리들 없이 하노라(前もって心配の種をなくしておこう)」と言って「돈과 병창기와 글발과 밧이것 아논이(金と武器と書およびこれを知る者)」とともに立ち去る。ここには人間に災いをなすものについての李光洙の考えが表われている。しかし何といっても最大の改変は、他の研究者も指摘しているように、許生員が五年間で巨額の金を貯めた経緯を下承業に聞かれたときの対応である<sup>39</sup>。原典では、朝鮮では商品が流通していないために取引が大きくなる、一つの商品を買ひ占めることが簡単であるという説明にとどまっているところを、李光洙の許生員は、「세상을 널리 쓰면 가난해 마다 가멸(世間を広く使えば行く先々で富・強調は引用者による)」というタイトルをつけた最終節で、「そもそもこの世界はいく先々に利が転がっており、それを取りこむことを知っている者だけが取って富を得

るのだ<sup>40</sup>」と言って、活動すべき場所と方法を下に教える。広い視野をもって大きな舞台で商業活動を行うことの勧めは、このころ『大韓人正教報』に書いた論説「独立を準備せよ」と共通する。

「独立を準備せよ」で李光洙は、「商業は、その国と自分の身を富ます(가멸게 하다・強調は引用者による)」と同時に、この地の文明をこの地に、かの地の文明をこの地に移して文明を伝播させ融合させる作用があり、(中略)文明が発達すれば商業が発達し、商業が発達すれば文明もともに発達する」と述べて、朝鮮民族に商才がある例として百済の海外商業活動と文明興隆を挙げている<sup>41</sup>。初めて海外に出た李光洙は上海で西欧資本が中国を完全に支配している情景に衝撃を受け、また貧しく悲惨な状態にある同胞たちの姿を目の当たりにして心を痛めた。「独立を準備せよ」は、この現状を打破するために、商業の振興による実力養成を訴えたものである。翻訳「許生員」にはこの問題意識が反映している。海外に出る前の李光洙は五山学校で仕事に追われ人間関係に悩み、このような広い視野を持つ余裕はなかったと思われる。大陸放浪が李光洙の人間形成に大きな影響を与えたことが推しはかれる。

帰国後、李光洙は翻訳「許生員」を下敷きにした散文詩「許生伝」を発表した<sup>42</sup>。

서울이라 下南村에 선배한분 살더니라  
움막살이 단간草屋 食口라고 다만内外<sup>43</sup>

(ソウルの下南村にソンピが一人住んでいた

穴倉のような一間の茅屋に家族は夫婦きり)

この詩は原典から離れて、ほとんど李光洙の創作といえるものになっている。妻に小言を言われても「大魚は深く潜んで道を磨き、千年に一度風雲に遭う日空高く舞い上がる」と澄ましこんでいる許生に対し、妻は「お元気で。私は出ていきます」と脅し、仕方なく許生は翌日、卜承業のところに行く。卜承業に万金の借り入れを申し入れたとき、原典と「許生員」ではその場で金を受け取っていたのが、ここでは五日以内に安城に持つてこさせることになっている。これは一九二三年に『東亜日報』で連載がはじまる長編『許生伝』と同じ設定である。そのほか、島を出ていく許生が残る人々に語る言葉も、「その妖怪があらわれれば家と家が争いが生じ、米櫃が血にそまって酒瓶はこわれ、唄をうたっていた口からは慟哭の声がもれる。その妖怪は顔立ちがよく言葉のうまい兄妹で、兄は〈金〉、その妹は〈文〉という」という豊かな想像力で彩られており、完全に李光洙の「許生伝」になっている。散文詩「許生伝」の後半部はまだ発見されていないが、翻訳「許生員」と散文詩「許生伝」そしてそれを発展させた長編『許生伝』の比較分析は今後の課題である。

李光洙は日本語の底本を自分なりに「翻訳」して『검둥의 설움』を書いたあと、漢文『熱河日記』を「翻訳」して「許生員」を書き、つぎにそれをもとに散文詩「許生伝」を書いた。このような「翻訳」が李光洙の朝鮮語の表現力の向上に役立ったことは、このあとの創作にあらわれている。再留学を前にして、李光洙は短編「無情」から五年ぶりの朝鮮語小説「金鏡」を発表した。ここには知識青年金鏡の精神遍歴と、留

学と民族奉仕のあいだで葛藤する彼の内面が、故郷の風景を背景にみごとに描きだされている。このあと東京に行った李光洙はそこで既婚男性の恋というモチーフを織りこんで「크리스마스밤(クリスマス夜の夜)」を書き、その年末には長編『無情』の執筆に入ることになる。

### おわりに代えて——『無情』の表記問題——

以上、『無情』以前の李光洙の初期創作を「翻訳」という側面から再照明してみた。明治学院で日本語と朝鮮語とで創作を始めるころ、李光洙は映画を「翻訳」して「血涙」と「어린 희생」を書いた。母語と切り離された環境にいる彼に「翻訳」は朝鮮語表現能力を高める役割を果たしたのである。卒業後は五山学校の教員をしながら、『Uncle Tom's Cabin』の日本語抄訳、堺枯川の『家庭夜話第三冊 仁慈博愛の話』と百島冷泉の『通俗文庫第二編 奴隸トム』の二つを底本にして『검둥의 설움』を書くことで、文章力と小説構成力を身につけた。大陸放浪の途中では漢文『熱河日記』の一部を訳して『먹적골 가난망이로 한 세상을 들먹들먹한 허생인』を書き、つづいてそれを土台にした散文詩「許生伝」を書いた。この詩はのちに長編『許生伝』へと発展する。

李光洙の「翻訳」はその後もつづいた。上海亡命から帰国したあとはトルストイの戯曲「闇の力」の翻訳単行本『어둠의 힘』を刊行している<sup>(44)</sup>。これについて調査してみたが、いまのところ底本になったと思われる日本語訳書は見あたらない<sup>(45)</sup>。李光洙は五山学校時代にトルストイの英語版全集を持っていたと書いているから、英語版を底本にした可能性は大きい。早稲田大学で学び、上海で二年間を過ごしたあとの彼にはそれ

だけの実力があつたはずである。このほかにもカレルチャペックの戯曲を訳述した「人造人」<sup>(47)</sup>やシェイクスピアの「ジュリアスシーザー」の部分訳などがあり、李光洙がつねに他言語と接しながら表現能力を高める努力を怠らなかつたことがうかがわれる。

最後に、本稿のテーマである「翻訳」から少しはずれるが、本稿を書きながらずっと気になっていた、「無情」の純ハンゲル表記に関する問題について述べておきたい。表三に見るように、ロシア滞在中に書かれたものはすべて純ハンゲル文である。だが、これは李光洙の自覚的な選択ではなかつた。『勸業新聞』と『大韓人正教報』は純ハンゲル文で書くことになつていたし、<sup>(48)</sup>『아이들 보이』も掲載作品をハンゲル表記の합니더体口語文に統一していたので、その方針に従つたにすぎない。<sup>(49)</sup>旅からもどつた李光洙が発表した作品は、随筆一編とハンゲル短詩三編のほかは国漢文である。韻を踏んだ純ハンゲル文の詩は、このころの李光洙がさまざまな文体を模索していたことを示唆するが、自分が編修した『새별』に童話「물나라의 배판(水の国の排判)」を国漢文で書いていること、また、一度は純ハンゲル文で「許生員」を書いた彼が、散文詩「許生伝」を国漢文で書いていることに、この表記に対する李光洙の愛着の根強さがあらわれている。

一九一〇年に『皇城新聞』に寄稿した論説「今日我韓用文에 대하여」で李光洙は、「理解が難しい純ハンゲル文で書く」と新知識の輸入を阻害する恐れがあるので他日を期すことにして(中略)私がいま主張するのはやはり国漢併用文である」と書いている。もちろん「ハンゲルでは書

けないものだけを漢字で書いて、そのほかはすべてハンゲルで書く」と新しい文体を主張してはいるが、国漢文を基調とみなしていたことは間違いない。この考えが大陸放浪を終えて再留学したあとも変わらなかつたことは、一九一六年三月発行の『学之光』第八号にある詩や小説が国漢文であることから明らかである。<sup>(50)</sup>

ここで問題となるのが長編『無情』の表記である。先述したように、『無情』の前に書かれた「크리스마스만」も、『無情』連載が始まつてすぐに書かれた「少年의悲哀」「尹光浩」「彷徨」の三編も、そして『無情』を書きあげた直後に書いた書簡体小説「어린 벗에게(幼い友へ)」も国漢文である。『毎日申報』で『無情』の連載が終わると紀行文「五道踏破旅行記」をはさんで『開拓者』の連載が始まるが、これも国漢文である。要するに、『無情』だけが例外的に純ハンゲル文なのである。

じつは『毎日申報』には連載直前の一二月二九日(一九一六年は年末の三〇日と三一日が土日で休刊だった)まで、「文壇の新試験」として『無情』には国漢文を採用するという予告記事が掲載されていた。ところが、元且に連載が始まってみると『無情』は完全なハンゲル表記だったのである。方針はなぜ突然変更され、それは誰の意図によるものだったのか。

一九一〇年代の『毎日申報』では、まず新小説、ついで翻案小説が大きな人気を博していたが、この時代の小説のつねとしてそれらはすべて純ハンゲル文であった。おそらく李光洙は新知識人としてそれらと一線を画すという意気込みをもって長編『無情』を国漢文で書き、新聞社側も李光洙の希望をいったんは受け入れて予告記事を出したのだろう。新

聞社としては、このさい知識層をあたらしい読者として取り込みたいという打算も働いたと思われる。<sup>52</sup>だが最後の瞬間、この方針は変更された。一月一日の紙面には「小説文体変更について」という通知文が掲載され、変更の理由として以下のような李光洙の手紙の一節が引用されている。

漢文混用の書翰體는 新聞에 適치 못한 줄로 思하여 變更한 터이오  
며 私見으로 朝鮮 現今의 生活에 觸한 줄로 思하느니마 후 일부 有教育  
한 青年間에 新土地를 開拓할 수 있으면 無上의 幸으로 思함 (下略)

(漢文混用の書翰体は新聞に適さないと、変更した次第であります。私見では朝鮮現今の生活に触れたものと思っております。もしや一部の教育ある青年の間に新土地を開拓することができれば、無上の幸いに存じます。(下略)

年末のうちに李光洙は七〇回分以上の原稿を新聞社に送っていた。そのなかで「書翰体」で書かれているのは、第五〇回の英采の遺書しかない。「流れるような宮女体のハングル」<sup>53</sup>で書かれている手紙が、紙上で国漢表記になっていれば読者に違和感を与えることになるだろう。それを恐れた李光洙が、英采の書翰部分だけを純ハングル文に書き直して差し替えを依頼したのではないか。そして、この手紙を差し替え原稿に添えて送ったのではないかと推測されるのである。<sup>54</sup>

そもそも『毎日申報』に書きはじめて三カ月しかたっていないこの時点で、連載開始の寸前に方針をくつがえすだけの発言権が李光洙にあっ

たとは思われない。むしろ李光洙の国漢文小説をいったんは受け入れた新聞社側が、最後の瞬間に届いた差し替え原稿の流麗な純ハングル文を見て、小説読者の嗜好にはやはりこちらが合っていると判断して冒険をとりやめる決断を下したと考える方が自然ではないか。時間的に見て、原稿をハングル表記に書きかえたのは現場の担当者であろう。<sup>55</sup>李光洙が一月中旬に書いた三つの短編に見られる挫折感には、あるいは自分の小説の表記が勝手に変更された衝撃も混じっていたのかもしれない。<sup>56</sup>

それにしても、驚嘆すべきは『無情』の原稿の漢字をハングルに直しても何の問題も生じなかったことである。やむを得ず漢字を使うにしても文体そのものは漢文でなく朝鮮文でなくてはならないという『皇城新聞』でおこなった主張を、李光洙は実行し、すでに成し遂げていたのである。

とはいえ、漢字を使う場合とそうでない場合とでは、作家が筆を持つときの意識は違ってくる。『無情』の後半の文章が前半の文章に比べて格段に近代的になっているのは、後半が最初から純ハングル体で書かれたためだと思われる。<sup>57</sup>要するに、表記を替えることによって李光洙の文章は近代的な文章へと変貌したのである。

だが、それにもかかわらず、李光洙の国漢文への愛着はつづいた。このあと『無情』と『五道踏破旅行』の成功によって新聞社に対する発言権を強めた李光洙は、『開拓者』<sup>58</sup>を連載するときには国漢文で書くという自説を貫徹したのだろう。李光洙が本格的に純ハングルで小説創作を始めるのは、上海亡命から帰ってからのことである。

注

- (1) 原文は『김동희설음』。本稿ではすべて新表記を用いる。
- (2) 金東仁『朝鮮近代小説考』(一九二九) 金治弘編著『金東仁評論全集』三英社、一九八四、七六―七九頁／「文壇三〇年の 자취」(一九四八)、同書四三四頁。金東仁は三人称の不在や形容詞と名詞の不足に苦しみながら、過去形の使用と口語体による近代的な文体創出に努力したことを語っている。
- (3) 波田野節子『極秘新韓自由鍾第三号』(隆熙四年四月一日発行) 의 이광수 관련자료에 대하여『近代書誌』第五号、二〇一二、소명출판、二二九―二六二頁／『極秘新韓自由鍾第壹卷第三号』の李光洙関連資料について『韓国近代作家たちの日本留学』白帝社、二〇一三、一二四―一四二頁。ここに李光洙は「君は伊処に」と「旅行の雑感」の二つの作品を載せている。
- (4) 「浮雲」第一篇と第二篇は明治二〇年と明治二一年に金港堂から刊行され、第三篇は明治二二年に文芸雑誌『都の花』に連載された。「あひゞき」は明治二二年八月『國民之友』、明治二二年一月『都の花』に発表されている。
- (5) 伊藤整『日本文壇史二』講談社、一九五四、三五頁
- (6) 一九一五年三月発行『青春』六号
- (7) とはいえ、以下の研究がある。김병철『西洋文學移入史研究第一卷 韓國近代文學史研究』乙西文學社、一九八八(初版一九七五)、三三四―三三六頁／권두연『신문관 단행본 번역소설 연구』、『사이』人間SAI』五、二〇〇八／『김동희』이로 시작된 한글 표상영을 탐즈 케민의 번역 양상을 중심으로』『피라넬』創刊号／박진영『번역과 번역의 시대』소명출판、二〇一二、二四三―二四六頁
- (8) 底本の確定は筆者と崔珠瀚氏との合作であったことを明らかにしておく。本稿の注(19)を参照のこと。

- (9) 「君は伊処に」は李光洙が友人を装って自分のことを語ったもの、「献身者」は五山学校を創立した李昇薫がモデルで、ともに小説と随筆の間に位置するが、ここでは完全創作でないということで随筆に区分した。
- (10) 波田野節子『極秘新韓自由鍾第壹卷第三号』一三八―一四〇頁
- (11) 同上二三四―二三七頁。紀行文の日付は一九一〇年三月二三日から二四日まで、二六日に発行された明治学院の卒業式に李光洙が出席していなかったことがわかる。五山学校勤務の都合か、あるいは二六日が安重根の死刑執行の日であったことも関係しているのかもしれない。
- (12) 波田野節子『李光洙の自我』『李光洙・「無情」の研究』白帝社、二〇〇八、八五―八九頁／하타노 세쓰코『이광수의 자아』『무정』을 읽는다』소명출판、二〇〇八、一〇七―一一三頁
- (13) 「春園文壇生活二十年을機會로한『文壇回顧』座談会」『三千里』一九三四年一月号、二四〇頁。「ほかの人に文芸への趣味を持たせるため、私は一週間に一度集まるこの会合で一人芝居をしたりして、小説の話をできるだけ面白くして聞かせたものです。」ところで『新韓自由鍾』第三号には三月二〇日に開かれた「李宝鏡氏の送別会」の記録があるが、余興に「ヲトギバナシ」が入っている。楽しい話くらいの意味であろう。こんなふうに李光洙は仲間たちに自分が読んだり見たりした話をしたのだろうと想像される。
- (14) 金宇鍾はこの作品を「李光洙の初期作品のうちでは、これは信じがたいほど傑出した作品であった」と述べている。金宇鍾著・長璋吉訳『韓国現代小説史』龍溪書舎、一九七五、六四頁
- (15) 波田野節子『李光洙の自我』八一―八二頁／하타노 세쓰코『이광수의 자아』一〇一―一〇三頁

(16) 「日記」に「日本文壇에 기록 들고 나실까 (日本文壇に打つてるか)」という文句が見える。『朝鮮文壇』第七号、一九二五、六頁

(17) 「新文館發刊新小説」は新文館が翻訳小説の広告(未見。注(7)の권두연論文による)で使った言葉で、『검둥의 설움』のほかに、『질리버 유람기 (ガリバー旅行記)』(一九〇九・二)、『불쌍한 동부 (フランダーズの犬)』(一九二一・六)、『만인계 (万人契)』(一九二二・九)、『허풍선이 모험기담 (ほらふき男爵の冒険)』(一九二二・五)、『자랑의 단추』(一九二二・一〇)が入っている。권두연『신문과 단행본 번역 소설 연구』一一九頁/박진영『번역과 번역의 시대』一八六頁。박진영は新文館から刊行された単行本翻訳小説として、このほかに『해당화 (海棠花)』を挙げている。

(18) 권두연『검둥이로 인식된 흑인 표상』『영광 톨즈 케빈』의 번역 양상을 중심으로』피라네, 創刊号、二〇〇七。なお、筆者の依頼に応じて論文を送ってくれた권두연氏にこの場を借りて感謝の意を表する。

(19) 筆者が調査を始めたのは、崔珠瀚氏に何度も要請されたためである。崔珠瀚氏が朴珍英氏からいただいた挿画を筆者に送ってきたので、それを筆者は勤務校の図書館を通して国会図書館のリファレンスに照会し、二三種類の英語版『Uncle Tom's Cabin』とアンクルトムのイラストを集めた下記のインターネットサイトを見たが、挿絵は見つからなかった。http://utic.edu.virginia.edu/uncleTom/illustra/chXch.htm。そこで李光洙が明治学院中学時代に使用したテキストではないかと考えて、明治学院大学教授の秋月望氏に依頼して学校蔵書を探していただいたが、やはり見つからなかった。この場を借りて秋月氏に感謝の意を表する。そのころ崔珠瀚氏が『奴隷トム』が部分的に底本として使われていることに気づいて筆者に知らせてきた。これをふまえ、国会図書館から

送られたリストに入っていた『仁慈博愛の話』とテキスト対照をしてみても、ようやく底本が二冊である事実に気づいた次第である。したがって底本の確定は崔珠瀚氏と筆者の共同作業であり、むしろ崔珠瀚氏の熱意が筆者を動かした結果といえる。なお一九一三年に日本で刊行されていた『Uncle Tom's Cabin』訳本は、『仁慈博愛の話』と『奴隷トム』のほかに二つある。明治三八年一月から二月にかけて『英文新誌』に三回だけ連載された桜井鷗村訳「黒人トム」(対訳)と、明治二九年から三〇年にかけて『國民新聞』に四回だけ連載して中断した敬天牧童訳「トムの茅屋」である。『仁慈博愛の話』と『奴隷トム』は国会図書館デジタルライブラリーの以下のURLで見ることができる。http://kinda.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/877433\http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/755014

(20) たとえば『번역과 번역의 시대』の著者は、新文館の翻訳単行本には内外出版協会「通俗文庫」を底本にしたものが多いことから、『通俗文庫第二編 奴隷トム』が底本ではないかと考えてテキスト対照をおこなった。ところが『奴隷トム』の付録「ストウ夫人」が『검둥의 설움』の序文「ストウ夫人の事績」の底本になっていることまで確認しながら、本文の底本でもあることには気づかなかった。『검둥의 설움』の前半では『奴隷トム』ではなく『仁慈博愛の話』が主として底本に使われていたためである。同書二四三頁

(21) 「はしがき」で堺は、暇がないために従弟の津野又郎に訳述を依頼したが、体裁・方法・順序等について多くの助言を与えたので、これは二人の合訳と言つてよいと書いている。

(22) 『仁慈博愛の話』(十五)、九五頁

(23) 『仁慈博愛の話』の各章のタイトルは以下の通り。ジョージ夫妻に関わる章の番号をゴシック表記する。



- (一) 奴隷の説明
- (二) 借金ほどツライものは無い
- (三) 「物」であつて人では無い
- (四) モウどうしても我慢が出来ぬ
- (五) トム爺クロー婆
- (六) ハリや、お前は買られたのだよ
- (七) してやったりという顔つきで
- (八) 滑るやら、飛ぶやら、踏みはづすやら、躓くやら
- (九) 唇が動くばかりで聲は少しも出ぬ
- (十) 己アお前さまの志しだけで澤山だ
- (十一) 私の母は七人の子供と一緒に公売に附されました
- (十二) 今夜こゝへ来なさるのだよ
- (十三) 千三百圓ではお安いものです
- (十四) 旅は長くして手紙は短く
- (十五) 思ひやりという云う事は微塵も無い
- (十六) 自由の為に飽くまでも戦ひます
- (十七) 私いっそ地獄へ行きたいだアよ
- (十八) トム爺がお手紙を書いているのよ
- (十九) 私こんな碌でなしだからウンと打つが好えた
- (二十) 読み書きができぬので皆がどの位つらがつて居るか知れませぬわ
- (廿一) トムだつて大変子供を恋しがつて居ますわ
- (廿二) 罪ある者を救う為に天降つた天の使
- (廿三) お前にも天国で逢えるとわねえ

- (廿四) 「其打震ふ聲の響に其言葉よりも人に感じさせる力があつた
- (廿五) 人は何時死ぬものでも無い
- (廿六) 人間の顔を被つた鬼
- (廿七) 私の魂ばかりはお前様買ふこと出来ねえだ
- (廿八) 親子夫婦抱き合つた儘で天を拜した
- (廿九) 散りぎは近き姥桜
- (三十) 私や殺されてもお前様を怨みはしませんぞえ
- (三十一) 私神様に買はれて行く身だよ
- (三十二) トムの恩
- (24) 「まえがき」で百島は「自分は奴隷トムとエバンゼリンから多くの教訓を学んだ。願わくは読者諸君も然らむことを祈る」と書いている。なお、『奴隷トム』には章番号のみでタイトルはついていない。
- (25) 박진영編『新文館翻訳小説全集』소면출판, 二〇一〇、二二八―二三〇頁
- (26) 박진영編『新文館翻訳小説全集』二二九頁。原文は「조지가 가로되 / 자. 봅시오. 나도 사람 모양으로 걸어앉을 줄도 알지요. 내 얼굴이 남만 못하오니까. 손이 남만 못하오니까. 지식이 남만 못할까요. 이래도 사람이 아닐까요?」。『검둥의 설음』第八章にあり、『仁慈博愛の話』の(十一)の一部の訳である(六三三頁)。三中堂『李光洙全集』第一九卷所収のテキストと対照すると少し違っている。「걸어앉을」が「걸터 앉을」になり、「손이 남만 못하오니까. 지식이 남만 못할까요。」の一文が消えている。これは崔南善が引用する際に間違つたのではないかと思われる。(『李光洙全集』三七六頁)。ところで全集を編集した노영환氏は「後記」に、一九三五年九月から『三千里』に長期連載された「검둥의悲哀」と初版単行本とはテキストに相違があり、文章の美しさでは連載本の方が優つ

ているが、文献としての価値を考慮して単行本を全集に入れたと書いている。一方、권두언氏は「文体の修正なくほぼそのまま連載された」（註（7）論文一二六頁）と書いている。一度はきちんとした異同の調査が望まれる。

(27) 韓国語テキストは『李光洙全集』第一九卷所収の「翻訳小説검검의 설음」を使用。なお旺文社から刊行された大橋吉之輔訳「アンクルトムの小屋（上）」（一九六七年発行）と（下）（一九六七年初版一九八六年重版）を日本語訳参考テキストとして使用した。

(28) 「ブラック・シネマ」『世界大百科事典第二五巻』平凡社、二〇〇七改訂新版、六五頁

(29) 「話劇」『世界大百科事典第三〇巻』平凡社、二〇〇七改訂新版、五四七頁

(30) 延辺大学主催第三回中・日・韓・朝言語文化比較研究国際シンポジウム予稿集所収、基調講演「李光洙の大陸放浪と中国第二革命——「無情」が東京で書かれたわけ——」参照。なお論文は二〇一四年春に延辺大学日文学研究所から刊行される『日本語言文化研究』第三輯に掲載予定

(31) 崔起栄「一九一四年李光洙의 러시아 체류와 문필활동」『植民地時期民族知性 과 文化運動』、図書出版한울、二〇〇三、一五五頁

(32) 同上 一六三—一八一頁

(33) 朴趾源・今村与志雄訳『熱河日記二』、平凡社、一九九五（初版一九七八）を参考にした。

(34) 박지원・리상호 옮김 『열하일기下』、보리、二〇〇四、五八七頁

(35) 崔珠瀚「근대소설 문체 확립을 향한 또 하나의 도전」『近代書誌』七号、二〇一三、二二二頁

(36) 本論文中の日本語訳は特に断らない限り拙訳である。

(37) 『붉은저고리』は一九二三年一月に創刊されて六月に終刊、『아이들보이』はその年九月に創刊されて一九一四年八月に終刊、李光洙が編集に携わった『새별』は一九一三年一月に創刊されて一九一五年一月に終刊した。

(38) 注（35）論文で崔珠瀚は、『熱河日記』のなかの許生に関する話はさほど長くないので、李光洙が原文を完全に暗記していたものを訳したのだろうと推測している。しかし崔南善がその頁だけを李光洙に与えた可能性もある。

(39) 崔珠瀚「근대소설 문체 확립을 향한 또 하나의 도전」、二〇九頁

(40) 同上、二二八—二二九頁

(41) 崔起栄「一九一四年李光洙의 러시아 체류와 문필활동」一六七頁。なお「가별」という語は「無情」の最終章にも登場する

(42) 朴八陽は一九三六年『三千里』二月号に書いた「朝鮮新詩運動史」で「草創期新詩の人道主義的傾向」が現れた詩の一つとして、この散文詩を挙げている。

(43) 『새별』一六号、一九一五年一月／김종욱 「특종자료발굴」『연인』二〇一二年冬号、一一二頁

(44) 李光洙翻訳『어둠의 힘』中央書林、一九二三年九月刊行。『李光洙全集』第一六卷所収

(45) 調査した日本語訳書は以下の通り。落合昌太郎（浪雄）『暗の力』興文館書店 一九〇五、宇野喜代之介『トルストイ全集第四卷』春秋社一九一九—二〇、中村吉蔵訳『トルストイ叢書五 闇の力』新潮社一九一七、宮森麻太郎著『近代劇大観』玄文社一九二二。秋庭俊彦『闇の力』植竹書院一九一五年は未見。

(46) 「나」『李光洙全集』第一卷、五〇九頁

(47) 『東明』一九二三年四月。『李光洙全集』第一九卷所収。和田とも美は『李光洙長篇小説研究—植民地における民族の再生と民族』で李光洙のこの記事につ

いて言及し、内容の類似性から『週刊朝日』一九二三年一月の長沼重隆による紹介記事を見たのではないかと推定しながらも、「李光洙の英語力や情報網を考慮すれば、東欧やアメリカにおける公演の盛況をすでに知っていた可能性もある」と書いている。二七六頁

(48) 『東亜日報』一九二六年一月一日。『李光洙全集』第一六卷所収

(49) 崔起榮はこの媒体の文体について「国文専用は読者層の教育程度や石版印刷の問題とも無関係ではないが、僑胞新聞の一つの特徴でもある」と書いている。

「一九一四年李光洙의 러시아 체류와 문필활동」一五五頁

(50) 崔珠瀚「근대 소설 문체 확립을 향한 또 하나의 도정」二〇五頁、二一九頁

(51) 詩「어린 벗에게」と小説「크리스마스밤」。金榮敏は「このころ李光洙は言文

一致の文章の重要性について認識はしていたものの、時代的制約と個人的な実践力の限界などにより、いまだ自己の主張とその実践との乖離という二重性を見せている」と指摘している。『韓国近代小説史』舎、一九九七、四四七頁／『韓国近代小説의 形成過程』소명출판、二〇〇五、一八三頁

(52) 咸苔英「一九一〇年代の李光洙の登場とその意味―『毎日申報』の路線との

関係を中心に―」『朝鮮学報』第二九輯、二〇一一 参照

(53) 波田野節子訳『無情』第五〇節、平凡社、二〇〇五、一七六頁

(54) 金榮敏は「結局、『無情』は二通りの版本が存在したと見なくてはならない」と書いている。『韓国近代小説의 形成過程』一八三頁

(55) 金榮敏は一九九七年の『韓国近代小説史』で「結局、『毎日申報』が李光洙小説の国漢文混用体を取り入れたのではなく、李光洙が『毎日申報』の純ハングル文体に従ったのである」と書きながらも、これは『毎日申報』の読者層を意識した李光洙の自覚的な選択だったとしている。二〇〇五年の『韓国近代小説

の形成過程』でもその意見は変わっていない。

(56) これまで波田野は、第一に五山と妻を捨ててきたことへの挫折感、第二に肺結核を発病して死を覚悟した挫折感を指摘していた。『李光洙・『無情』の研究』三一〇頁／「体験と創作のあいだ」『韓国近代作家たちの日本留学』、一〇七頁

(57) 金榮敏は前掲書一七〇頁の註六〇で、李光洙が「作家로서 本 文壇의 十年」(『李光洙全集』第一六卷、三九五頁)で、最初に書いた純ハングル小説は『無情』だと回想していることを指摘しているが、後半だけとはいえ、『無情』が最初に純ハングル文で書いた小説であることには違いがない。また李光洙のこの回想は、翻訳である「김동의 설음」と「許生員」を純ハングル文で書いたことが自覚的な選択でなかったことを傍証している。

(58) 社内での李光洙の重要度が上がったことは原稿料の増額が象徴する。李光洙は、最初はひと月五円だった原稿料が『無情』の連載が終了するころは一〇円、「開拓者」連載が始まるころは二〇円になったと回想している。「李光洙の第二次留学時代」『韓国近代作家たちの日本留学』四九頁

・本研究は、日本学術振興会より研究費補助(基盤研究(B) 研究番号二五二八四〇七二)『朝鮮近代文学における日本語創作に関する総合的研究』を受けている。

・本稿は、二〇一三年一〇月二六日に早稲田大学で開かれた国際シンポジウム「朝鮮近代文学、その萌芽と展開」での発表「李光洙と翻訳」を一部修正したものである。

『追記』早稲田大学での国際シンポジウムには、延世大学の金榮敏教授も参加しておられ、本論文の発表を聞いてくださった。翌月三〇日に武蔵大学で開かれたワークショップで再び金榮敏にお会いしたところ、金先生は本論文に対するこ

意見を筆者にくださった。先生によると、当時「書翰体」という語は、書翰の文体だけでなく、より広く国漢文体という意味で一般に使われていたという。端的な例として、「無情」で国漢文を採用するという『毎日申報』の予告記事でも、そのような使われ方がされているというご指摘であった。たしかに予告記事には、「従來의 小説과 如하 純諺文을 用치 아니하 고 諺漢交用書翰文體를 用하 여 (従來の小説のごとく純ハンゲル文を用いずに国漢混用書翰文体を用いて)」と、「諺漢交用書翰文體」が国漢文の意味で使われている。筆者の迂闊さを恥じる次第である。だが、このころ肺結核を発症していた李光洙にとって七〇回分の原稿すべてを短時間で書き直すのは難しかったと思われる。この問題については、今後さらに考えていきたい。筆者の発表に対して真摯で貴重なご意見をくださった金榮敏先生に心からお礼を申し上げる。

**Lee Kwang-su and his “translation”  
A Study of “검둥의설움” (1913)**

HATANO Setsuko

Up to now, study of “검둥의설움” has not proceeded since the source texts are not known. In this paper, the original text of “검둥의설움” (published by Sinmungwan, February 1913) translated by Lee Kwang-su (李光洙) were determined and then compared with the translated works. Based on the results of this comparison early works by Lee Kwang-su leading to “無情” were once again highlighted in terms of “translation”. In Chapter 1, Lee’s early works written prior to Japan’s annexation of the Korean Peninsula are considered. In Chapter 2, “검둥의설움” is analyzed. In Chapter 3, Lee’s creative activities are traced from the publication of “검둥의설움” until his writing of “無情”, bringing the period of his wandering journey in the continent into view.

During his early writings in Japanese and Korean at Meiji Gakuin, Lee “translated” films and wrote “血淚” and “어린犧牲”. This “translation” work must have aided Lee, who was isolated from his mother language, to improve his expression in Korean. After graduation, Lee worked as a teacher at Osan School and acquired writing skills and novel composition skills by writing “검둥의설움”, using Kosen Sakai’s “仁慈博愛の話” (堺枯川) an abridged Japanese translation of “Uncle Tom’s Cabin”, and Reisen Momoshima’s “奴隷トム” (百島冷泉) as source texts. Later, he set out on a wandering journey across the Asian continent. While staying in Chita, Russia, he wrote a nursery tale, using “玉匣夜話” of “熱河日記” written by Park Ji-won (朴趾源) as a source text. Upon returning home, he wrote a prose poem entitled “許生伝”, based on the nursery tale. Later, this poem developed into the full-length “許生伝”. Lee engaged in translation after his return from Shanghai, indicating that he continued to learn languages and made every effort to enhance his expressive ability.

When writing this paper, the author could notice Lee’s deep seated attachment to the mixed style of writing Hangul with Chinese characters. Based on this finding, it is inferred that the notations used in the full-length “無情” were originally written in the mixed style of Hangul with Chinese characters, and revised in Hangul right before serialization in “每日申報”.